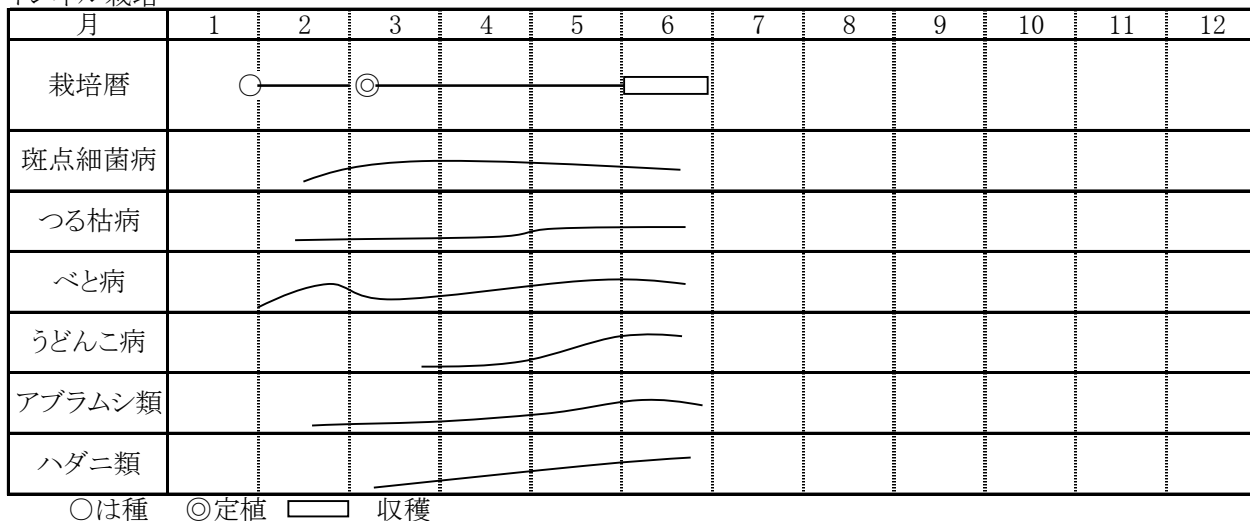


(12) メロン

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

トンネル栽培



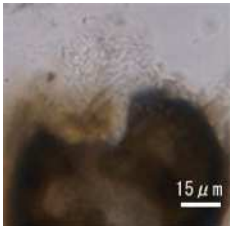
2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
モザイク病 (CMV等)、 えそ斑点病 (MNSV)、 黄化えそ病 (MYSV)、 退緑黄化病 (CCYV)	①種子伝染するものは、消毒した種子を用いる（野菜種子の消毒の項参照）。 ②虫媒伝染するものは、防虫ネット被覆、シルバーマルチ、シルバーテープなどにより苗への媒介昆虫の飛来を防ぐ。 ③接触伝染するものは次のことに注意する。 i) 接ぎ木ナイフは消毒したものを使い、連続して使用しない。 ii) 苗床から生育初期にかけて、発病株の早期発見、除去に努める。 iii) 疑似症状株の管理作業は最後に行い、手は石けんでよく洗う。 ④発病株は速やかに抜き取り、適切に処分する。 【参考事項】 主な病原ウイルスはキュウリモザイクウイルス（CMV）、メロンえそ斑点ウイルス（MNSV）、メロン黄化えそウイルス（MYSV）、ウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）である。CMVは虫媒伝染（アブラムシ類媒介）と接触伝染、MNSVは種子伝染、土壌伝染（オルビディウム菌の媒介）及び接触伝染、MYSVは虫媒伝染（ミナミキイロアザミウマ媒介）、CCYVは虫媒伝染（タバココナジラミ媒介）をする（ウイルス病の伝染方法の項参照）。
斑点細菌病 (細菌)	①種子は乾熱消毒したものをを用いる。 ②苗床では、発病株の早期発見に努め、ほ場に持ち込まないようにする。 ③排水を良くし、多湿とならないように管理する。 ④敷きわら、マルチなどにより、土壌表面から病原菌がはね上がるのを防ぐ。 ⑤収穫後は発病茎葉を適切に処分する。 ⑥発病時に使っていた支柱などの資材は薬剤で殺菌しておく。
つる割病 (Fusarium)	①種子は乾熱消毒したものをを用いる（野菜種子の消毒の項参照）。 ②抵抗性品種、抵抗性台木を利用する。 ③発病株を早期に発見し、適切に処分する。 ④収穫後、茎葉を処分する。 ⑤石灰を施して土壌酸度を矯正する。 【参考事項】 乾湿差の大きいときに発生が多い。 センチュウの加害により発病が助長される。
黒点根腐病 (Monospora- scus)	①発病株を早期に発見し、適切に処分する。 ②収穫後の被害株は極力除去する。 ③農機具、苗などにより汚染土壌を未発生地に移動させないようにする。 ④ウリ科作物の連作を避ける。 【参考事項】 高温期に収穫する作型で被害が大きい。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	
つる枯病 (<i>Didymella</i>)	①発病株を早期に発見し、適切に処分する。 ②株元を高くする。また、灌水の水が地際の茎にかからないようにする。 ③苗での持込みに注意する。	
	【参考事項】 多湿時に発生が多い。	 
炭疽病 (<i>Colletotrichum</i>)	①収穫後、茎葉を適切に処分する。	
	【参考事項】 多雨時に発生が多い。	
ベト病 (<i>Pseudoperonospora</i>)	①多湿になりやすい時期は、換気により湿度を下げる。 ②被害茎葉を適切に処分する。 ③排水を良好にする。 ④肥料切れさせない。	
	【参考事項】 曇雨天が続くときに発生が多い。 下葉に激発した場合は発病葉を除去する。	
疫病 (<i>Phytophthora</i>)	①排水を良くして、水たまりができないようにする。 ②定植時に株元を高くする。 ③発病株を早期に発見し、適切に処分する。 ④収穫後、茎葉を適切に処分する。	
	【参考事項】 多雨の年、低湿地に発生が多い。	
うどんこ病 (<i>Sphaerotheca</i>)	①抵抗性品種を利用する。 ②窒素肥料の過用を避ける。 ③収穫後、発病茎葉を適切に処分する。	
	【参考事項】 メロンのほかキュウリ、カボチャ、ヒマワリ、コスモスなどに寄生するが、一時的にでも寄生作物が断たれると発生は少なくなる。	
ミナミキイロアザミウマ	①施設周辺を常時除草する。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや目合い0.8mm以下の赤色系ネットを張り、侵入を防止する。 ③発生施設では収穫後密閉し、高温にして殺虫する。	
	【参考事項】 メロン黄化えそ病の病原ウイルス(MYSV)を伝搬する。 ナス、ピーマン、キュウリ、トウガラシ、スイカ、メロン、インゲン、キクに寄生が多い。	
コナジラミ類	①施設周辺を常時除草する。 ②外からの侵入を防ぐため、施設の開口部には目合い0.4mm以下の防虫ネットを張る。 ③発生施設では収穫後密閉し、高温にして殺虫する。	
	【参考事項】 オンシツコナジラミはメロン黄化病の病原ウイルス(BPVV)、タバココナジラミはメロン退緑黄化病の病原ウイルス(CCYV)を伝搬する。 オンシツコナジラミとタバココナジラミが寄生し、排泄物によりすす病が発生する。 施設栽培で天敵農薬を利用する場合は、天敵が定着できるよう長期間悪影響を及ぼす農薬は使用しない。 タバココナジラミは薬剤感受性などが異なるバイオタイプが存在し、遺伝子診断で識別可能である。	 

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
アブラムシ類	①ほ場周辺の雑草にも寄生するので除草する。 ②外からの侵入を防ぐため、施設の開口部には目合い0.8mm以下の防虫ネットを張る。 ③シルバーマルチをする。 ④苗による持込みに注意する。 【参考事項】 キュウリモザイクウイルス (CMV) などのウイルス病を媒介する。  モモアカアブラムシ (左) 、ワタアブラムシ (右)
ハダニ類	①ほ場周辺の雑草にも寄生するので除草する。 ②苗による持込みに注意する。
センチュウ類 (ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ)	①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。 ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタラリア・スペクタビリス、マリーゴールドなどが有効。 ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールドなどが有効。 ②太陽熱消毒を行う (土壌病害虫の防除法の項参照)。 ③有機物を施用する。 【参考事項】 メロンではネコブセンチュウによる被害が大きい。 対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。 有機物を施用すると、土壌中の生物相が豊かになり、センチュウ類の天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。